



教育目標 誰一人取り残さない 子供が育つ学校づくり

謹んで新春のお慶びを申し上げます

旧年中は地域の皆様方には、お世話になり厚くお礼を申し上げます。

新しい年が皆様方にとって幸多き年となりますよう、心からお祈り申し上げます。

学校・保護者・地域が力を合わせ、それぞれが学校を創る当事者としての意識をもって、西部地区、そして、河北町の未来を担う子供たちを育成していきたいと考えております。

本年も谷地西部小学校の教育活動にご理解をいただき、ご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願いたします。

令和6年能登半島地震による被害へのお見舞い

このたびの石川県能登地方を震源とする令和6年能登半島地震によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。また、被災者の救済と被災地の復興支援のために尽力されている方々に深く敬意を表します。

子供たちが安心して力を発揮できるために

1月2日、3日に行われた、第100回箱根駅伝大会。「駒澤大学一強」と言われていましたが、青山学院大学が、大会新記録で2年ぶり7回目の総合優勝を飾りました。

例年、私は、駅伝の競い合いというより、大学生たちの箱根駅伝へ挑戦していくドラマ（練習の過程や選手の思い）に興味があり、後日放送される総集編を見る程度でした。しかし、今年は、なんとなく駅伝の様子を2日間にわたり視聴しておりました。駅伝というスポーツではありますが、職業上、また、立場上どうしても「教育」と結び付けて見てしまいます。今回の箱根駅伝を見ていて、学校教育という視点と結び付け、私なりに気が付かされたことが2つありました。

1つ目。監督は、走っている選手に対して、伴走車の中から声をかける際、ポジティブな言葉だけをかけているのです。「大丈夫、大丈夫。」「おまえならできる。」「よくやった。」「あとは、4年生が何とかしてくれる。」もっとたくさんの言葉がけがありましたが、どれも、選手を安心させ、奮い立たせてくれるものばかりです。単なる言葉がけではありますが、どれだけ選手に勇気を与えてくれたことでしょうか。

2つ目。伴走車は、決して選手の前を進まないということです。選手の後ろから、選手のスピードに合わせて、そして、選手を見守る。

以上の2点を、学校教育に照らしあわせてみました。

1つ目の声かけについて。私たち教員は、日常的に子供たちにたくさんの声をかけます。当然、勇気付ける言葉がほとんどですが、時には、子供を傷付けてしまっている言葉をかけていることはないのだろうかということです。奮い立たせるためには、厳しい言葉も必要だという大人の理論をもって厳しい言葉をかけ、心を傷付けたり、逆にやる気を失わせたりしていることはないのだろうか。最も怖いのは、間違った言葉かけをして、子供たちが自律できる場を奪っているのではないのかということです。

2つ目の後ろから伴走することについて。ともすると、たくさんの経験をしている我々は、自分が正しいと思っていること（これからの世の中を考えたときに、正解かどうか疑わしい。）を子供に示して、子供ができるだけ失敗しないように、言い聞かせて、思い通りにさせようとはしていないのかということです。

当たり前のことではありますが、子供たちが、安心して自分の力を発揮できるようにするためには、子供を後ろ（または、隣で）から見守り、常にポジティブな言葉がけが必要なのだと、箱根駅伝を見ながら自分なりに納得したところです。

（校長 白田 敏幸）

学校評価についての報告

学校教育目標「誰一人取り残さない子供が育つ学校づくり」を実現するために、家庭や地域と目標を共有し、連携を図りながら学校経営を進めてきました。このことについて、昨年11～12月に実施した学校評価（自己評価〈教職員・児童〉及び、学校関係者評価〈保護者〉）をもとに、教職員による経営改善会議を開催し、成果と課題の分析及び、今後の取組みについて話し合いました。その内容について、下記の通り報告いたします。

【数字による評価】

A:できている (4点) B:おおむねできている (3点)

C:できていないところがある (2点) D:できていない (1点)

◇評価項目（視点）の内容は同じですが、質問の主語を変えています。

教職員：子供は、～できている。している。

児童：あなたは、～できましたか。しましたか。

保護者：あなたのお子さんは、～ができていますか。していますか。

	視 点	教職員 (7名)					児童 (29名)					保護者 (21家庭)				
		A	B	C	D	評点	A	B	C	D	評点	A	B	C	D	評点
学 び づ く り	自ら行動する力	1	4	2	0	2.9	16	12	1	0	3.6	1	17	3	0	2.9
	人を大切にする力	1	4	2	0	2.9	14	12	3	0	3.5	3	15	3	0	3.0
	考え抜く力	0	6	1	0	2.9	15	10	3	1	3.5	1	14	6	0	2.8
	主体的な学び	1	3	3	0	2.7	13	13	2	0	3.4	5	8	8	0	2.9
	協働的な学び	1	4	2	0	2.9	19	6	3	1	3.6	6	14	1	0	3.2
	ICT機器の活用	1	5	1	0	3.0	18	9	2	0	3.7	3	15	2	1	3.0
	自分たちで学びをつくる	0	4	3	0	2.6	23	4	2	0	3.9	0	10	11	0	2.5
	教科横断的な学び	0	6	1	0	2.9	21	7	1	0	3.8	2	10	8	1	2.6
行 動 づ く り	人を大切にする力	0	6	1	0	2.9	15	10	4	0	3.5	6	14	1	0	3.2
	居心地のよい学校	1	4	2	0	2.9	16	11	0	2	3.5	9	8	3	1	3.2
	安心できる学校	0	5	2	0	2.7	15	11	1	2	3.5	10	8	2	1	3.3
	お互いを尊重し合う	1	3	3	0	2.7	16	11	2	0	3.6	3	16	2	0	3.0
	自尊感情の育成	0	3	4	0	2.4	11	12	3	3	3.2	2	17	2	0	3.0
	自己決定の場の積み重ね	2	5	0	0	3.3	19	9	1	0	3.8	1	18	2	0	3.0
	対話を通じた合意形成	0	7	0	0	3.0	20	7	2	0	3.8	3	12	6	0	2.9
	場に合った行動	0	3	3	1	2.3	18	8	3	0	3.6	4	13	4	0	3.0
体 づ く り	健康に関心をもつ	0	6	1	0	2.9	18	9	2	0	3.7	5	13	3	0	3.1
	体力の向上	1	6	0	0	3.1	21	8	0	0	3.9	6	12	2	1	3.1
	基本的な生活習慣	0	6	1	0	2.9	14	9	5	1	3.4	4	15	2	0	3.1
	家庭におけるICT機器の活用	0	5	2	0	2.7	18	9	2	0	3.7	3	12	5	1	2.8

【学校教育目標『誰一人取り残さない 子供が育つ学校づくり』について】

- ◇ 学校教育目標がお題目ではなく、**学校づくりの最上位目標**として意識されるようになってきた。学校は、児童に「自分らしく生きる力をつける場所」であり、その根底にあるのが、「誰一人取り残されない」「自ら育つ力をつける」ことであると考えている。教育活動の中心は授業である。校内研究とも連動させながら、肅々と教育活動を実践していく。

【育成を目指す資質・能力の育成について】〈自ら行動する力〉〈人を大切にする力〉〈考え抜く力〉

- ◇ 3つの資質能力の育成をめざす理由を、系統表をもとに具体的な姿を子供たちと再度確認する。
- ◇ 自ら行動する力：子供が自分で考え、判断（選択）し、行動する場を今後も意図的に設けていく。
- ◇ 人を大切にする力：「人（自分・仲間）を大切にする」とは具体的にどのような言動なのかについて子供たちと確認をする。違いを認め多様性を尊重し、対話を通して問題を解決する態度を育てていく。
- ◇ 考え抜く力：初めてのことや苦手なことにも、くり返し挑戦することの価値づけ、失敗が許され、やり直しが認められる学校・学級づくりを引き続き行っていく。

【学びづくりについて】

- ◇ 「主体的な学び」「教科横断的な学び」「既習事項や生活・経験との関連付けた学び」が課題である。単元を通して育成したい資質能力や教科の見方・考え方を明らかにし、子供が見通しをもって学ぶことができるように「課題づくり」や「単元計画」を大事にしていく。「子供が主語の授業」、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の具現化に向け、自由進度学習、異学年合同学習等、子供の実態に合った学びの場づくりを工夫する。
- ◇ 学習に気持ちが向かない子供に対しては、その背景にあるものやその時の気持ちに寄り添いながら対話し、子供ができることを共に考え、選択させ、取り組めるようにしていく。非認知能力、メタ認知能力の育成が、学びの土台となること。その土台がしっかりしていることが、子供の認知能力の高まりにかかわることを確認する。

【行動づくりについて】

- ◇ 学校を楽しんでいると思っていない子供がいることを真摯に受け止め、一人一人の「居場所づくり」や「心理的安全性の保障」について、再度全体で確認していきたい。学校生活において、「多少我慢することも必要」ではあるが、ずっと我慢している子供がいるかもしれないという認識をもって、学校・学級経営にあたっていく必要がある。
- ◇ 自尊感情を向上させる手だてを探っていく。教職員間での対話や研修を通して、どんな取組みが有効かについて確認していく。まずは、「褒める」から「認める」への意識転換を図っていく。
- ◇ 集団生活において**トラブルが起きるの必然**であり、それを学びの場としてポジティブにとらえる。その際必要なのが「指導」ではなく、「子供どうしを言葉でつなぐ」ことである。児童としっかり対話し、**理解・納得**させていくことが大事である。時間を有する作業ではあるが、これから生きていく上で非常に大切な力であることを認識して支援にあたっていく。

【体づくりについて】

- ◇ 家庭での ICT の活用が課題である。学校として指導できることは、養護教諭の保健指導や担任による学級活動での指導が中心になるが、**家庭との連携**も必要になってくる。学級懇談会等を活用し、**保護者間で情報の共有**（実態や困り感、家庭での取組み等）をしていく。
- ◇ **教科担任制**をとってきたことで、西部小の体づくりとして大きな成果があった。体力の向上だけでなく、めあてをもって取り組み、達成感を味わう体験を数多くできた。児童の評価が高いことから、児童自身が実感できていることが分かる。

【目指す教師像『質の高い教師集団』について】

- ◇ 教育は大きく変わろうとしているのではなく、すでに大きく変わっている。それに対応していくためにも、**教師として「学び続ける」**ことが大切である。学び方は「教師自身の個別最適な学び」になってくるが、今やっていること、これまでやってきたことを「**問い直し**」ながら、支援や指導について省察することを大事にしたい。教職員としても自ら考え行動する力をつけていく。
- ◇ まず大事にしたいのは、「**教職員の心身の健康**」である。これがなければ、正常な教育活動は維持できない。同僚性とは何かについて確認し、お互い支え合える（困った時に助けを求められる）関係をつくっていく。

【保護者の方からのご意見より】

- ◇ **ブログ更新**について、前向きなご意見をたくさん頂戴した。児童の様子を伝える一つに手段としてこれからも有効に活用していきたい。また、学校ホームページの活用についても様々な取組みを模索していく。
- ◇ 教職員の児童に対する言葉がけについてのご指摘をいただいた。何気なく児童にかけている言葉が、子供を傷つけていることもあるということを肝に銘じ、児童の前で使用する言葉に気をつけていく。
- ◇ 他校との交流について、次年度も北谷地小学校との交流会を継続し、他校の児童と交流できる機会を大切にしていきたい。

【北谷地小学校との交流会】

2回目の交流会は、1・2年生が北谷地小学校を、3年以上が谷地西部小学校を会場に実施しました。学年ブロックごとに交流を深める会（学級活動や体育）の他に、単学年で授業も行いました。3年生は国語、4年生は外国語活動、5年生は国語、6年生は算数。授業の中での話し合いを通して、お互いの考えを深めることもできました。休み時間は、2校入り混じってのドッジボールを楽しみました。

他校との交流学習の意義について再確認したところです。来年度も実施する予定です。



【大谷翔平選手からグローブが届きました】

12月25日（月）に谷地西部小学校にも、大谷翔平選手からのグローブが届きました。年明け、子供たちがグローブに手を通しました。普段、ほとんどキャッチボールをしない子供たちですが、喜んでキャッチボールを楽しんでいました。大谷選手の力は素晴らしいです。



〈大谷選手からの手紙〉抜粋
 ロサンジェルス・エンゼルス・オブ・アナハイムのメジャーリーガー、大谷翔平です。
 この手紙は、このたび私が学校に通う子供たちが野球に興味をもってもらうために立ち上げたプログラムを紹介するためのものです。
 この3つの野球グローブは学校への寄付となります。それ以上に私はこのグローブが、私たちの次の世代に夢を与え、勇気づけるためのシンボルとなることを望んでいます。それは、野球こそが、私が充実した人生を送る機会を与えてくれたスポーツだからです。
 野球しようぜ。
 大谷 翔平



おめでとう！

全国読書感想文コンクール（西村山地区） 入選 6年 田宮佳直

全国読書感想画コンクール（西村山地区）

入選	1年 宇野桔平	2年 阿部香苗	2年 小野純音	3年 林 優月
	4年 阿部未依	4年 齋藤慎太	6年 宇野愛絆	6年 本明幸花